

阿部 昭
エッセーの
楽しみ



岩波書店

エッセーの楽しみ

阿 部 昭

岩 波 書 店

エッセーの楽しみ

一九八七年九月一日 第一刷発行 ©
一九八七年一〇月三〇日 第二刷発行

定価 一三〇〇円

著 者 阿 部 昭 あきら

発行者 緑 川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五十五
株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・五五二
振替 東京六二六四

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000202-3

目 次

I

松林、海、日光	3
黄金の日々	17
文学青年	23
三十年前の受験生	26
夢見るひと	30
「道」の思い出	46
歳末の訪問者	51
草の上で	56
空き地	56
イメージ	58
国木田独歩	60
夜の音	62
八月に	65
動物園の空	69
夫婦の会話	72
続・三十年前の受験生	75
動物のいる暮らし	79

幼い母の写真	83
--------	----

Ⅱ

百円均一の箱	91
万年筆・インク・原稿用紙	94
リーダーの挿絵	101
『ヘンリー・ライクロフトの手記』を読む	103
漱石の小品	108
短篇小説の青春	114
あるチェーホフの読者	145
葛西善蔵の教訓	149
論争として振り返し	156
エッセーの楽しみ	161
画家の文章	166
「ふらて」の終焉	173
実用とフェア	178

「クールでフレッシュだった」……………189
闊歩する常識……………194

Ⅲ

酒の肴	199	夏の本	202	雨傘	205	運勢	207	スピーカー	209
挨拶	212	歌声	214	時代	216	犠牲	218	晩夏	220
空腹	225	浮き雲	227	猫族	230	形式	233	蜻蛉	235
新人類	239	日本語	242	人と狼	244	花の絵	246	机の上	250
城下町	252	アンケート	254	超越	256	十二月八日	258	貧乏	261
夕映え	263	国際化	265	私の暦	267	未来図	270	早春	274

あとがき

発表紙誌一覧

表紙カット マイヨール『ダフニスとクロエ』木版挿絵（一九三七）より

I

松林、海、日光

松の木の多い土地で、松林に囲まれて暮らしてきたが、そのことを取り立てて考えたことはなかった。それがいまごろになって気になり出したのは、これも年齢のせいにはいなかった。松といえば、子供の私はまずその梢のあたりをふり仰いで、黒い繁みの中に何か鳥の巣がありはしないかとうかがってみた。そうして幹をよじ登りにかかる、首すじを松葉の針で刺されたり、手や服を松脂まつぎだらけにされたりした。下にいても、松毬まつかきや花粉はいいけれども、地面がその一色に染まるほど毛虫を降らせるのは閉口だった。

つき合うのが厄介なうえに、松にはいやな噂もつきまといっていた。ひとときわ高い松の木の下へんには、大鷲にさらわれた子供が引っ掛かっていそうな気がした。「首くくりの松」だの「おいでの松」だのいう、いわくつきの木もあった。闇夜に、何か因縁の囁かれる場所で、松の枝が意味ありげに「おいで、おいで」をしたとて、いまの私は怖くもなんともあるまい。む

しろ笑い出すだろうが、子供の私はそうは行かなかった。

それに、葉の色が好きになれなかった。大人たちが松のみどりと呼んでいたあの緑には、多量の墨がまぜられているようで、学校で写生の時間に下描きの上に絵の具を塗るとき、画面が必要以上に黒ずんで、きたなくなつた。すると、急に気分までが暗くなり、仕上げるのがだんだんおっくうになつた。松のために私はどれだけ手こずらされ、やり直しをしなくてはならなかったか。

そんなわけで、とにかく松というのは面白くない木の代表だつた。松のほうでも、子供には用はなさそうだつた。大人だけがありがたがつて、しかつめらしくその枝ぶりなどを觀賞してゐた。年寄りくさい、氣むずかしい慰みものの木。それはもう木そのものが老人みたいだつた。もっとも、大人どもはその結構な松の木を実用の具にもしてゐた。近所のある家では、小さな男の子を折檻するのに、夫婦二人がかりで、太い松の幹に細引きか兵児帯か何かそんなあり合わせのもので結わえつけて、何時間も放置してゐた。むろん幹は子供の胴回りの何倍もあつた。

その子がわあわあ泣く声は、ずいぶん遠くまで聞こえた。いっとう大きな声を出すのは、引つ立てられて縛りつけられる時で、泣き疲れると当分のあいだは静かだが、忘れた頃にまた一と騒ぎがあつた。最後にやっと縄目を解かれる段になつて、今度は安心から泣き出すのか、勘

弁してやるついでに親が腹いせにひとしきりおまけの打擲うちなげを加えるからか。子供はまた、日が落ちると周囲の暗がりにおびえ、やがて自分をつつみ込む真の闇を想像してよいけい泣きわめくのであるらしかった。

その家の敷地は、道路よりもだいぶ高く、かつ庭のほうが高くて、北側の家屋のほうになだらかに下っていた。もともとは松におおわれた砂山だったにちがいないが、当時は今と違って、むやみに土を崩したり均ならしたりせず、簡単に玉石を築いただけで起伏のままに住んでいたものだ。だから何十本もの大きな松で日中もいやに暗い、陰気な家が少なくなかった。そういう家は、屋根の松葉を搔かいて落とすだけでも大仕事だったし、庭につもった枯れ松葉もあまり放っておくと、通行人にタバコの吸殻を投げ込まれて火がつくことがあった。

天日をさえぎる松のむれと幼児の折檻せがんとが結びついて、その家は子供心にいつも忌まわしく陰惨な感じで迫った。苗字みょうじもちゃんと覚えているのはきつとそのせいだ。それは「景山」という姓で、その二字の響きが年じゅう子供を地獄の目に会わせている（としか私には思えなかった）家にびったりしていた。

私は通学の往き帰りに、景山家の石垣に沿って、うつむきがちに（坂になっていたから）、とぼとぼと重い足を運ぶ（疲れて空腹で）のだが、小学生の背丈では家の中まではのぞき込めなかった。年も違ったので、その子供とは遊ぶこともなかった。たしかもう一人、生まれてまも

ない妹がいた。

泣き叫んでいる子の両親、つまり景山夫妻は、その界限では一風変わっていて目についた。二人ともなかなかハイカラで、東京からでも来たようだった。色白の、小柄な美男の、若い主人は、勤めに出ているらしかったが、遊び人に見えた。が、いつもなにかおどおどしたような目をしていて。そして奥さんのほうも、まだ娘っぽいとは言っても、とびきり派手な赤いものを着て出てくるので、近所の主婦の陰口の対象だった。ずっと後年、私は映画で初めてダニエル・ダリューという女優を見たとき、ちょっと彼女のことを思い出した。薄い唇をきつと結んで、にらむように人を見るところがよく似ていたけれども、あの奥さんの目はもっとこわかったと思っただ。

二人はべつに仲が悪いというのではなさそうだった。いや、むしろ反対だったろう。その時代では噂になるぐらいしじゅう連れ立って歩いていたのだから。そんな二人は一对のお雛様とも、西洋人形とも、絵に描いたおしどり夫婦とも言ってよかった。

そのような男と女の組み合わせから、いかなる理由によって常習的な、むごたらしい幼児折檻の図が出てくるのか。いかにして彼らはそれぞれの立場でああも緊密に協力し合うことが出来たのか。おなじ大人なら、それを何か極端な無知の所為^{しよゐ}とか、不自然な性愛の犠牲とか、勝手な理屈をつけて詮索をたのしんだかもしれない。だが、私は当の子供だったから、子供

を可愛がらぬ親というものが理解できなかった。で、どんな悪いことをしたのか知らないけれど、毎日のように松の木にぎりぎり巻きにされて、泣いてあやまっている子がかわいそうというより、仕置きに熱中している大人どもが恐ろしかった。

いま考えると、その子の場合、夫婦にとつては彼がこの世に存在すること自体が悪かったのだ、これは親にしてみれば当然のことだった。一体、子供はやさしく扱ってやらねばならぬなどというきまりがあるだろうか。子供がおのれの分身なら、そこには憎しみもたつぷり入っているのが自然というものだ。わが子でなくてさえ、あの子供という種族、甘ったれた、身勝手な、ずるくて、神妙で、庇護と教育を必要とする、非力で足手まといの、うるさい不潔な動物どもは、たしかに大人の人生のじゃまになる。なんだって子供を嫌って悪い理由がある？ 連中をなぶりものにしちゃいけないという理由がある？ この退屈な人生に自分の子供を折檻するぐらいの楽しみはあってもいい。

彼らはあの戦争中はもちろん、戦後もちろぬかなり長くそこに住んでいたが、いつか家屋敷を売り払ってどこかへ越して行つた。しかしやはりこの市内にはいたらしく、つい近年にも私は二人を何度か、夫婦づれのところを見かけたおぼえがある。そのつど、「昔のあの家の二人だな」と見過ごしたただだが、同時に、「いつまでも仲がいいな」とあらためて感心したりした。二人で街で買物でもしてきたのだろう、主人のほうが重たい荷物を持ってやり、遅れてくる細君

を振り返って何かいたわるように声をかけている、そんな場面に行き合わせたこともあったから。そういう時もやはり夫はあのおどした物腰、妻はきつい目をしていたが。

当時私が十歳として、もう五十を過ぎたのだから、彼らは少なくとも六十五から七十にはなっているだろう。息子や娘がどうなったかは知らない。元気でいるなら、とくに親から解放されて所帯を持っているだろう。

自分から望んだ結果か、必然の帰結か、とにかく二人がまた水入らずの暮らしにもどり、老境の日々を楽しんでいることは間違いなかった。ただ、二人とも年をとってかえって容貌の特徴があらわになり、なにか役者のカップルが美男美女のまま老け込んだような痛ましさを感じられた。

ところで、その景山という家から北へ向かう百メートルばかりのあいだは、通りがなんとなく陰気くさく、実際にも松が多くて湿っぽかった。途中、「秦野」という間口も奥行きもある大きな農家があり、その座敷牢には「アイちゃん」という狂女が押し込められていた。いや、座敷牢は私は生け垣のすきまからその見当をうかがっただけだったが、アイちゃんの姿は一度だけこの目で見たことがあった。彼女が何かのひょうしに往来へ抜け出し、海のほうへある距離を自由に歩くことに成功した時だった。が、この時もすぐに通報が行き、たちまち家人にかまって連れ戻されてしまった。

私は、彼女のこととはちっともこわくなかった。アイちゃんは道のまんなかに突っ立って、おだやかに笑っていたから。整った顔かたちは美人と言ってもおかしくなく、そこに浮かんた微笑も、そこらの普通の、やさしい母親のものと変わりがなかった、ただ彼女がもうちょっとまともななりをしていさえすれば。

だが、アイちゃんはやはり普通じゃなさそうだった。はだしだし、髪はのびきってばらばらだし、着ているものは布の切れはしをただ何枚もぶら下げただけといった風体だった。だから誰にも彼女の歳はわからなかったろう。私がうけた一番の印象は、彼女の顔や手足がいやに黒く、てらてら光って、その色だけは精悍な男みたいだったことだ。座敷牢でそんなに日焼けするはずはないから、あれは垢がつもってあんな色をしていたにちがいない。

アイちゃんとは、その家の何だったのだろう。出戻りの娘でもあったのか、それともどの息子かの最初の嫁だったのか。秦野というその農家は、土地ではずいぶん古い家系のようだった。私はいまでもたまに自転車を通りかかるが、昔と変わらぬ敷地の南のはずれに、ぐるりを石垣と松で囲んだ、離れ小島のような一角があって、それが同家の墓地だった。入り口に鉄の扉、石の灯籠が二つ、墓石は大小あるが二十ぐらい並んでいる、その中にひょっとするとアイちゃんのものもあるのかもしれない……

しかし、どうやら私は松の木を子供の頃の偏見で語りすぎたようだ。松の林のあるところ、

そこがきつと暗く、じめじめと、陰気な場所であるかのように書くのは、松に対して不公平だ。もちろん、藤の蔓^{つた}なんかががんじがらみにからみついて入り口のない、ジャングルみたいな松林もあれば、見るからに気味が悪くて踏み込む気になれぬ松林もあった。が、一方には、一年じゅう明るく、居心地がよくて、子供たちが好んで出入りした松林があった。それらの松林が完全に消えうせてしまった今、私がつくづくと思い返すのは、むしろ松林の中では日蔭がいかに明るかったかということだ。

アイちゃんのところからもう少し行った「江村高志君」の家などはまさにそうで、大きな松に取り巻かれていたけれども、家の内も外も至極明るく、庭の土はすみずみまで子供の足で踏みならされて、快適だった。江村君とは、私は幼稚園の時からいっしょで、国民学校に上がったからも小田急ですつといっしょにかよった。

南にひらけて、夏は涼しく冬は日あたりのいいその庭は、なんと明るい庭だったろう。一日すうすうと潮風が吹き抜けるぐあいに出ていて、そういう庭はいかにも子供が自然に寄ってくる庭でもあった。そして、子供の溜まり場だからそうなるのか、もともとその家の主婦が構わない、だからか、家の中まであけっぴろげで、遊び道具がそこらじゅうに散らかっていた。よその子も自由に縁側から上がり下りするので、あちこち砂だらけだったが、それでも叱られもしなかった。近い年齢の兄弟がいない私は、毎日江村君のところに入りびたりで、そこにあつ